重友毅

近松の研究

文理書院

重友毅著作集第三巻
近松の研究
定価三〇〇〇円
一九七二年四月三〇日初版第一刷発行
著者重友毅
発行者畑太郎
発行所株式会社文理書院
東京都文京区関口一―一―五郵便番号一一二
小石川郵便局私書箱二四号
電話東京二六八局四一一一番振替東京七六一三四
印刷所明和印刷株式会社
製本所山田製本株式会社

© Ki Shigetomo 1972

3395-510038-7397

はしがき

近松について、始めて論考を発表した年から数えて、すでに四十年に近い歳月が流れている。その間常に近松にのみ親しんでいたわけではないが、機会あるごとに関心はその方へ向いた。それ以前、まだ学生の頃、年代でいえば大正の中頃から末年へかけて、私は折々上京して来る文楽座の公演の熱心な見物だった。今は亡き数々の名匠たちの技芸に接したことは、もとより直接近松に結びつくものではなかったが、後日その理解の上に大きく役立った。いよいよその作品を前に、調査に取掛ってからは、それまでに出た研究書の類に目をさらし、知識の上では大いに得るところがあったが、それ以上心を惹かれることもなく、かえって後年、シェークスピアの悲劇を論じたブラッドレーの著書を見るに及んで、目の覚める思いをした。またその訳本の解説に、彼の仕事が、他の批評家の仕事が終るところに始まる、といってあるのにも感銘を覚えた。

その後自分でも、多少の収穫を基に、昭和十四年に『近松』（日本古典読本　日本評論社）、同三十三年に『近松浄瑠璃集上』（日本古典文学大系　岩波書店）などの書を公刊することになったが、これらの本文校注や解題を離れて、研究書として纏めたのは本書が始めであるといってよい。

綜合芸術の一要素である浄瑠璃本文の研究は、複雑といえば複雑、困難といえば困難であるが、やはりこ

れは音曲・人形との関わりを考慮に入れながらも、どこまでも文学作品として眺めるよりほかはないものと思っている。もっともこれには、その音曲・人形との関係を主位に立てて、これを究めるという技術的な行き方もあり、それもあってよいこととは思うが、これには始めから限界が予想され、また求めて視野を狭く限ることでもあり、結局補助的なもので、本道を行くものとは思えない。また文学作品として眺めるにしても、世話物を重視し、時代物を軽視する傾向が跡を絶たないのは、明治以来の偏見を継ぐものであり、また一種の簡便主義でもある。近松に接して、時代物の妙味に味到し得ないのは、むしろ研究者としての未熟さを証するものといってよい。

本書の第一篇は、主に概説的なものを収めた。中に解説的な言辞が混るのはやむを得ないが、もとよりそればかりではない。第二篇は作品論で、自分の最も興味を注ぎ、力をも籠めたのは、この部分である。取上げた作品の中、時代物の数は少ないが、その重んずべき理由については、そこでも説いておいた。第三篇は、近松の中心課題と見るべきものについての論考を収めた。

始めは、従来筆にしたもので間に合うつもりでいたが、取出して見ると意に満たぬものが多く、これを全面的に改稿するとともに、またこの機会に新たに稿を起したものもあり、それらが全体の量の半ば近くに及んだ。そのため意外の日数を費し、予告の刊行期日を大幅に遅らせるに至ったことをお断りしておく。

昭和四十七年一月

重友毅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

近松の研究　目次

はしがき　一

第一篇

・近松の生涯　二
・歌舞伎作者としての近松　三〇
・浄瑠璃作者としての近松　五五

第二篇

・『曽根崎心中』の根本問題　七一
『傾城反魂香』　九七
・『冥途の飛脚』の問題点　一四三
『相模入道千疋犬』　一六七
『大経師昔暦』　一八八
・『国性爺合戦』の成功について　二二六

『寿の門松』と町人道　二三三
『平家女護島』　二八三
『心中天の網島』の解釈　三〇五
『女殺油地獄』　三四〇
『宵庚申』のお千世　三八九

第三篇

藤十郎と近松　三九七
『難波土産』について　四〇七
近松の制作苦心談　四一三
義理と人情　四五〇
近松の世界　四六三

索引　四七一

近松の研究

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一篇

近松の生涯

——とくに初期の経歴について

一

近松門左衛門（承応二年・一六五三—享保九年・一七二四）が、井原西鶴・松尾芭蕉とともに、元禄文学の支柱をなす存在であったことはいうまでもないが、それにもかかわらず、彼の生涯の経歴の委しいことは、今日もなお十分に明らかではない。もちろんこのことは、彼の伝記が、単に年代的にその業績をたどるのに不都合なく整備されるまでに至っていないというだけではなく、作家としての彼の本質を究める上に必要なカギとなる重要事項についてすら、まだ十分な確信をもって断言出来るところまでも行っていない実情にあることを指している。そしてこのことは、今日においてこそ、彼の偉大さがあまねく認められているにせよ、彼の生存し、活躍した当時においては、すぐれた劇作家として珍重されることはあっても、その劇作家なるものが、決して社会的に尊敬されることはなかったことと関係のあることと思われる。しかしそれにしても、おおよその判断をつけ得るだけの材料は、熱心な探究者の手によって、ある程度集められるところまでは行っている。

二

まず、彼の身分・出自についていえば、これには極めて乏しい彼の遺文の一つが、何よりも確かな資料として、われわれの前に置かれている。それは彼が烏帽子・狩衣を着けた肖像（自画像と伝えるが、おそらくそうではあるまい。あるいは、彼の子梅信の筆に成るものか）の上に記された画讃の語で、みずからその死を予期して、没前十日あまりの頃に筆を執ったものであるところから、世に「辞世の文」と呼ばれているものである。

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂（ひ）て商買（売カ）しらず、隠に似て隠にあらず、賢に似て賢ならず、ものしりに似て何もしらず、世のまがひもの、からの大和の教ある道々、妓（伎カ）能・雑芸・滑稽の類まで、しらぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ、一生を囀りちらし、今はの際にいふべくおもふべき真の一大事は、一字半言もなき倒（当カ）惑、こころに心の恥をおほひて、七十あまりの光陰、おもへばおぼつかなき我が世経畢んぬ。

もし辞世はと問（ふ）人あらば、

それぞ辞世去（る）ほどに扨もそののちに

残る桜が花しにほはば

享保九年中冬上旬

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士

不レ俟二終焉期一予自記春秋七十二歳囘囘

のこれとはおもふもおろかうづみ火の
けぬまあだなるくち木がきして

この引用は、「辞世の文」そのものに拠ったが、同じものは、『今昔操年代記』『羇旅漫録』『睡余小録』『南水漫遊』『仮名世説』『声曲類纂』などにも収められ、辞句に多少の相違はあるが、内容において異なるところはない。

ところで、この「辞世の文」は、いかにも臨終を覚悟した人の言葉らしく、きわめて正直な感懐が吐露されており、またそのような際に陥りがちな弱気が手伝ったものとはいえ、謙虚な人柄が窺われ、そこにいささかの気取りもなく、自身をごく平凡な、ありきたりの人間として位置づけていることが知られるのである。しかしそのうちにも、自作の浄瑠璃作品には、さすがに愛着もあり、またある自信をも抱いたらしく、「それぞ辞世」の歌には、古浄瑠璃の常套文句を使って、もしも自作の浄瑠璃本が、死後もなお上木されることがあるならば、その浄瑠璃本こそは自分の辞世であるの意を寓している。しかしそれと同時に、「のこれとは」の歌で、自作の浄瑠璃本が後に遺ることを期待したが、それは愚かなことで、埋火の消えるまでのわずかの間さえもたぬほどの、はかなく、値打ちのないものを書き散しておきながら、の反省を加えている。そしてこのことは、その謙抑な人柄とともに、芸術作品の社会的地位の、まだ定まらない当時を思わせるものといっていい。

しかしそれとともに、ここで注目もされ、また当面の問題とも関係があるのは、彼がはっきりと、自己の身分・出自を明かしており、またそれをひそかな誇りともしていることである。もっともこういえば、庶民芸術家として一生を送った彼に、このことがあるのを不審に思う人もあるであろう。しかしそれは、今日のわれわれの考え方であり、身分というものに強い関心と執着を持った当時の人間の一人として、彼がこの誇り

を捨て得なかったのは、むしろ当然のことというべきであった。またこのことは、彼が武家の出であるということだけではなく、一時公家社会に身を置いたということにも関わっている。現実に勢力を持つ持たないということに関わりなく、古い伝統に支えられて、庶民の遙か上位に位すると考えられていたその社会に接近し得たという思い出は、庶民の立場に身を落し切った彼であればあるだけに、いっそう忘れがたいことであったに違いない。だからこそ彼は、この「辞世の文」の肖像をも、いささかしかつめらしい狩衣姿に画かせたのであったし、またその辞世の歌を詠むにあたっても、ほかならぬ後水尾院の「御影の御自詠」に、「うしや此の太山(みやま)がくれの朽木がきさても心の花し匂はば」があるのに、所縁を求めたのでもあった。いうまでもなく、「さても心の花し匂はば」は辞世の第一首、「朽木がき」はその第二首、の発想の元となっている。(注)

(注) 藤井乙男『近松門左衛門』「雑著遺墨」の章に、近松の二首の辞世を、後水尾院の御製「よしや身は深山がくれの朽木がき扨も心の花し匂はば」(展閲目録所載)に基づくものとしており、諸書いずれもそれに従っているが、『後水尾院御集』「釈教部」によると、御製は正しくは右の本文に引くとおりであり、しかもそれが「御影の御自詠」であってみると、それは近松の場合と全く同じ状況下に詠まれたものであったことが知られ、いよいよ近松がこれを手本としたものであることがはっきりする。

こうしてこの全文は、まだ作家というものの社会的地位が認められなかった当時、その作家として生き通すよりほかなかった彼が、「世のまがひもの」としてみずから卑下しながら、しかもなおその作品を捨てがたいものとして、押えがたい自信のほどを示したものといってよいが、しかしその場合にも、彼が卑賤の出でなく、身分・教養において高いものを持っていたことが、その自信を側面から支えるものとして、彼に忘れられてはいなかったことを、ここに注意しておく必要がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com